森と海からの手紙

★2便★

# 人々が集い来る「聖地」

## 慰霊登山の傍ら 整備続く

「生死一如」。生と死は一対のものとして、いのちを明日へと育んでいく。倒木の根元から再生してくひこばえのように……。

長野、埼玉と県境を接する群馬県上野村は、森林が98%を占める山間の村である。その最深部にある浜平集落から車で十数キロを走り、さらにつづら折りの急峻な山道を歩いて登ること40分。標高1539メートルの稜線に「昇魂之碑」が建立された「御巣鷹の尾根」にたどり着く。

その尾根に、東京発大阪行きの日本航空ジャンボ機が墜落したのは、1985年の盆休みの前日だった。

日本経済が成長を続け、「より早く、より大量に」が求められた時代だった。520人もの犠牲者数は、単独機事故としては今でも世界最大となっている。

あの夏、墜落の衝撃で尾根の木々は広範囲になぎ倒され、山肌が露出。散乱したままくすぶり続ける機体の残骸の間で、自衛官や警察官が捜索活動を続けていた。

それから数年間は、尾根から動物や鳥の姿が消えた。墓標が次々と建てられ、やがて、荒廃の大地に草木が芽吹き、生き物たちが戻ってきた。

カラマツの森をスコップやツルハシを手に整備に向かうダン組の面々

そして、今春の大型連休。丈を伸ばした山桜やシャクナゲの花が、慰霊登山にやって来た人々を出迎え、その傍らでは、登山道や墓標の整備作業が行われていた。

日航職員らが整備を始めたのは、事故の2年後。以来、年に4～6回の作業を続け、慰霊登山を支えてきた。その輪に、次男の健さん（当時9歳）を亡くした美谷島善昭さん(75)の姿もあった。

あの夏、プールで25メートルを泳ぎ切った健さんに、両親は一人旅の航空チケットをプレゼントした。健さんはあこがれの夏の甲子園を観戦するために、両親に見送られて搭乗ゲートをくぐった。

事故翌日から現場で取材をしていた私が、急斜面をはうようにして登って来る美谷島夫妻を目にしたのは、発生から4日後だった。当時は浜平集落からの車道はなく、捜索隊の踏み跡をたどり、泥まみれになって5時間がかりでたどり着いた。

美谷島さんが整備作業に参加したのは、事故から24年後だ。「会社勤めも終え、これからは、私たち家族も山を守っていく」。当時の胸中を、そう語っている。

犠牲者の家族と日航側の共同作業には当初、気遣いや壁のようなものが存在した。

仲を取り持ったのが、大島文雄さん(78)だった。日航の山岳部OBで、事故の年から登山支援を始め、退職した後も御巣鷹に通い続けてきた。

墓標が建つ場所はほとんど記憶していて、墓標の文字がかすれると、自ら筆を執って書き直した。

歳月を経て家族の高齢化が進み、山に登れなくなった家族に代わって供え物を手向けたのも大島さんだ。祖父母に初孫をお披露目しようと帰省中に事故に遭った親子3人の墓標に並ぶ、3体のお地蔵さん。後に残されたおばあちゃんから届く赤いよだれかけを取り換えるのは、恒例になっている。

10年近く前から、私も美谷島さんや大島さんと一緒に整備に参加している。美谷島さんは、遺族会「8・12連絡会」事務局長の邦子さんの旦那さんであることから、御巣鷹に集う人々は親しみを込めて「ダンさん」と呼んでいる。整備に当たるのは「ダン組」。ダン組は、今では総勢7人になった。

墓標には、残された者から贈るメッセージが記されている＝いずれも御巣鷹の尾根で

4年前には、事故当時に朝日新聞社の記者として現場取材に当たった高松浩志さん(61)が加わった。事故直後に現場に入り、手荷物の中から競って遺書を探るような取材のやり方に呵責の念を覚え、30年近くも御巣鷹の尾根に足を踏み入れることができなかった。PTSD（心的外傷後ストレス障害）という言葉がまだ使われていない時代だった。

「記者人生を終える前に、記者としても人としても、きちんと御巣鷹の山に向き合いたい」。初作業を終えた夜の、高松さんの思いである。

東日本大震災で18歳の長女を亡くした宮城県亘理町の大工、早坂満さん(60)は、昨春から顔を出している。御巣鷹山の事故の遺族が整備を続けていることを知り、「悲しんでばかりいるのではなく、自分にもできることを何かしたかった」。

遺族らが休憩する山小屋はこの冬、雪崩で屋根の一部が破壊された。その修復は、大工のスキルなしには果たせなかった。仲間は早坂さんを「棟梁」と呼んでいる。

事故から37年を経て、御巣鷹は、災害や事件や事故で掛け替えのない人を失った人々も集い来る「聖地」のような存在になった。

天に昇りし者と、今を生きる者を結ぶ御巣鷹の山を源とする清流の名は「神流川」。ダン組のメンバーは「体力が続く限り、整備作業を続けていこう」と約束している。

【客員編集委員・萩尾信也】

＝毎月第3火曜掲載